

老いの青春謳歌（63・7・16）

渡辺源太郎（昭12文丙）

ただ今、ご紹介頂きました渡辺でございます。今日は諸先輩始め多数お集まりを頂きまして、私の拙い話を聞いて頂くということで大変恐縮致しておるところでございます。今までこの席でのお話は神陵文庫で拝見させて頂いております限りスポーツに関する話というのは殆どみかけなかったように思うのであります。尤も、今、井垣さんから伺いまして、なる程と思つたのですが、第三巻に我々陸上部の大先輩である湯浅佑一さんが、すでにいろいろとお話されていますので、そういったことで、今日の私の話というのは私自身の陸上競技に関する話が中心となりますので、多少、私の記録、その他、細かいことを申し上げて、あるいは鼻につくようなことになるかもしれませんが、悪しからずお許しを頂きたいと存じます。

今までは、大体この席で学者、諸先生、各界の名士の方々の学問的なお話、或いは文化のかおり高いご講話が多かった様に思いますが、昨今、日本でもなんとかオリンピックの成績をあげよ

うというようなこともありまして、政府でも大変スポーツに力を入れて参っております。最近ではスポーツ省を設けようかというような話にまで発展しているようなことを考えますと、今日ここで私がスポーツについてのお話、特に中高齢の方々についてのお話を申し上げるのも決して無意味ではなからうと、己惚れておる次第でございます。

又、先日、三高百二十周年記念大会が盛大に行われましたが、その中で一高代表の祝辞がございまして、まず取りあげられましたのは三高との対抗戦の話であったと記憶を致しております。事程左様にスポーツを中心とした両者の結びつきが大変大きな意味を持つておったことを物語るものであらうと考えるのでございます。

それから、今一ツ、有名な教育学者でありました小泉信三先生のお説をご紹介させて頂きたいと思うのですが、先生の「ペンと剣」と題する文の中でこのように述べておられるのであります。「スポーツによって養われるものは、ただ逞しい筋骨かと思うものがあるが、そんなものではない。苦難に耐える習性、咄嗟の危機に判断を誤らない冷静、最悪の悲境に絶望しない氣力を養う上にスポーツの体験がものを言うことは、体験のある人の争わないことであらう。最後の機会は最後まで絶望しないもののみがつかむ。」というのでございます。私自身これを読みまして、大変いいことだなあと考えたひとりでございます。

最近、我々の先輩である桑原武夫先生が亡くなりましたけれども、先生の説によりますと

「スポーツは現代文明の一分野であり、そこには政治・経済・軍事・宗教・芸術・科学などが相互に作用しあい、浸透しあっている。現代社会のもつ諸欠陥がそこにすべて反映している。さまざまな欠陥が反映しているからこそスポーツ思想を深めねばならない。今こそ、優れたスポーツ思想家が生まれなければならない。」と言っておられるのであります。私自身としてはそんな高邁な思想を持つておるわけでもございませんので、所謂スポーツの一実践家という立場から拙い経験をお話させていただくにすぎないのでございます。

今日本は高齢化が急速に進みますことはよく御存知のところであります。三高の卒業が私共と一緒にだった早川崇氏につきましては皆様もよくご存じのことと存じますが、昭和十年の一高戦の際、応援団長として乱闘事件の責任をとって一旦退学され、その後復校して私どもと一緒に十二年に卒業され、東大は前首相の中曾根さんと同期であつたように思いますが、この早川さんが厚生大臣に就任されました時、あたかも當時は、日本の経済は次第に高度成長化が進みまして、先進諸国に追いつけ追い越せという時代であつたのでありますけれども、たまたま日本は当時長寿国第二位でありましたので、彼が就任致しました早々、なんとか日本は早く長寿国としても第一位、すなわち金メダルを取らなければならないというようなことを話されておつたのであります。その早川先生自身は残念ながら早く亡くなりましたけれども、今や日本は彼の念願どおり男女共長寿国一位になりましたものの、いわゆる高齢社会化が大きな問題となつてきてお

るわけでございます。

日本の老齡化につきましてマスコミが騒ぎだしたのは、昭和四十五年のことでございますが、当時六十五歳以上の老人が7%を越えたということでありましたけれど、昭和五十九年には早くも9.9%、六十年には10.3%と10%を越えてまいりました。更に今後の見通しと致しましては、二十一世紀初めには15%を越え二千二十一年には24.6%に達する。つまり四人に一人は六十五歳以上の老人であるということになるといわれておるのであります。

又、先程も申し上げましたように、平均寿命の点で見ましても、昭和三十年に男子六十三・六歳、女子が六十七・八歳でありましたのが昨今の新聞によりますとすでに男子が七十五・六一歳、女子八十一・三九歳ということで三十年たらずの間に夫々十二歳から十三歳ものびてきているのであります。このような数字だけを見ておりますと、大変おめでたいことだというふうに考えられるわけでありますが、この様に老齡化した人間が一体どのような生き方をするのかというのが大きな問題だと思っております。

ある所で聞いた話でございますけれども、医学の発達によりまして、かつての死亡原因第一位であつた結核がいまや完全に克服され、癌についても遠からず不治の病ではなくなるといわれております。最後に残るものは、脳の老化によるボケの問題だということだそうであります。最近の新聞によりましても現在すでにボケ老人の数は七〇万、いやもっと多くて百万近いんだともい

われておりまして、二十十五年には一八五万人に達するという数字が上げられておるのであります。いかに長生きをすると申ししましても体が不自由であつたり、或いはボケ症状が酷かつたり或いは寝たきりの状態というようなことでは長寿国世界一といつてもなんら意味がないのではなからうかと思うのであります。そこで問題は如何に健やかに老いるかということが問題であらうと考えます。

そこで又、ある本からの引用を申し上げるわけですが「我が国が二十一世紀には、どのような状態になるかは的確に予想することは困難である。しかしながら、生活環境の機械化、情報化がますます進み、一方では、高齢者が総人口の20%以上になるということは確実であつて、そのようなこれまでに我々の経験になかつた社会に生存する人間の生きがいとは、一体何かといつた新しい問題を生じさせることにならう。そこでいかなる生きがいを見つけだすかは、個人差もあるし、全く予想はできないが、人それぞれが行いたいと思う動作を、何不自由なくできる体の状態を保つておくということは、予想もつかない未来の社会にあつても、悪い結果を生じさせるものではないであらう。それ以上に、そのような身体の状態を保持することによつてこそ、はじめて二十一世紀での生活を楽しむことができるのではないかと考えられる。

高齢者の予備軍である現在の中年年齢層の自殺者が増加する傾向にあり、反応性鬱病が増えていくことから、中高年齢層の人達は、そろつて生きていくための強い土台づくりに取り組むことがい

っそう重要ではないかと思うのである。体の機能が年齢と共に衰えていくことは仕方のないことである。しかし、体を積極的に動かすことによって機能的に老化の速度を緩めることが可能である、ということは今まであまり知られておらず、どうせ老人だからと諦めている人が多いのである。」以上は健やかに生きるということで、東京大学の教育学部体育研究室の有志が一昨年末に出版された「高齢者とスポーツ」という本に詳しく書かれておるのでございますけれども、この研究室におきまして、二回にわたってお年寄りの健康教室の手伝いをし、六十歳以上の人達に、週二回の頻度で運動することをすすめ、その結果、二か月もすると予想以上の効果が現われたというのでございます。その内容をご紹介しますと「運動時に毎月測定する血圧はしだいに低下していった。又、日常の生活の中でさえ体のバランスを崩しがちであったが、ちよつとつまづいても平気になったとか、速く歩けるようになったり、またはたまに訪ねて来る孫と同じ歩調で歩けるようになったというふうな人ができたのである。どんな運動をしたかというのと、まずウォーミングアップをして、体の末端部分の手や足を動かすのである。

例えば、椅子に座り、テニスボールを床に置いて、足の裏で押さえながらころがす。あるいは、テニスボールを握ったり、お手玉のように両手で交互に投げて受け止めるなどである。次に歩く。初めはゆつくりと、次第に歩幅を広げたり、膝を高く上げたり、又、横あるいは、後ろへ歩くといった変化をもたせる。そうして汗ばむようになったら深呼吸をして休みをとる。そのあとという

いろいろな関節を伸展、屈曲させるストレッチングをする。又、弱くなりつつある筋肉をやや力強く使うようなパワーアップの運動をする。そして再び汗ばむ程度フオークダンスやエアロビクスダンスなど音楽に合わせて全身を動かす。このような内容の運動を約一時間かけて実施したのである。

我々が手伝ったお年寄りの健康教室では、決して飛んだり跳ねたりはしなかった。そのような瞬発的な能力は高齢者には、ほとんど必要ないのである。それよりも、あまり激しい運動をすることは、老化が進んで弱りはじめた関節や骨、あるいは筋肉や腱^{ケン}を痛める結果となることに注意しなければならない」云々、とあるのでございます。このことは私がこれからお話を申し上げます。すまして陸上競技と一見矛盾するようなことでございますけれども、要は自分の能力に応じた運動をし、身体を積極的に動かすことによって老化の速度を緩めるという意味においては、全く同じではなからうか、と考えておるのでございます。

今一つ、中高年齢者の運動につきまして、ご紹介申し上げたいのは、岩波新書にでております「スポーツと健康」という本でございます。この本は順天堂大学体育学部教授の石河利寛^{イシコトシヒロ}先生の著書でございますが、先生は一九四四年東大医学部の卒業でございます。この本の中で中高年の運動を実施している人の寿命とそうでない人の寿命との間には、どのような差異が現れるかということを、一部書いておられるのであります。お手元にお配りしました資料にそのことが書い

運動の実施状態と死亡率 (Hannond, 1964)

(男子, 100人対)

年 齢	実施せず	軽 く	中等度	激しく
第 1 回調査				
45-49歳	1.06	0.56	0.38	0.23
50-54	2.08	0.80	0.55	0.33
55-59	3.60	1.58	0.86	0.59
60-64	4.90	2.32	1.19	0.92
65-69	10.33	3.85	1.74	1.38
70-74	11.02	4.92	2.60	1.56
75-79	16.05	6.55	3.46	1.96
80-84	16.43	8.49	3.96	4.49
85歳以上	22.13	12.08	5.67	2.78
第 2 回調査				
45-49歳	1.14	0.63	0.45	0.40
50-54	1.31	1.15	0.75	0.49
55-59	3.23	1.81	1.02	0.93
60-64	5.40	3.01	1.84	1.37
65-69	6.45	4.65	2.34	1.26
70-74	12.09	6.84	3.53	2.57
75-79	15.69	9.07	4.38	3.00
80-84	26.30	12.15	7.08	4.71
85歳以上	24.46	18.70	9.73	2.86

てございますので、読んで参りますと「中高年で運動を実施している人の寿命とそうでない人の寿命との間には、どんな差異が現れるでしょうか。アメリカのハモンドの研究をみてみましょう。すなわち、彼は一九五九年十月一日から、一九六〇年二月一五日までに、一〇六万四〇〇四人について、いろいろなデータを集めてこの人々の生死を第一回は一九六〇年十月一日、第二回は一九六一年九月三〇日付で調査しました。この結果第一回七二六九人、第二回九四五三人が調査までに死亡していたことが判明しました。そこで、死亡者の運動実施状態を前のデータから調べ、年齢別に運動実施と死亡率との関係を明らかにしたのが表一―五です。

表から明らかなように、年齢が進むにつれて当然死亡率が増加してきます。それとともに興味あることは、運動を実施していないと答えた人と比較して、運動をはげしく実施していると答えた人ほど死亡率が低下するという事実です。運動の非実施者と、はげしく実施している者との間には、死亡率に一部の年齢層を除いて五倍以上の差があります。この事実は、ほとんどの年齢層で共通しているので、かなり確かな現象といえそうです。

この調査からただちに、運動すれば長生きができると結論することはできません。しかし、両者の間には深い関連があることを物語っています。すなわち、中年以後に運動をよく実施していればいるほど、一年後に死亡する確率が減少する事は確かです。はげしい運動をする、ということとは、健康状態が良く体力が高いレベルにあるということを物語っていますが、このような元氣

な中高年者は近い将来に死亡する可能性が少ないわけです。

以上のように、運動と寿命との関係は、学問研究上の困難さもあって、すっかり究明されているわけではありません。その原因の一つに、青年時代から中高年に至るまで継続的に運動をしている人たちが従来ほとんどいなかったことがあげられます。最近やっと身体活動に親しむための諸施設が徐々に整備され、また中高年者の運動に対する関心が高まってきたために、規則的に運動を実施している中高年者が増加してきました。このような人たちを対象にして研究すれば、運動と寿命との関係がもつとはっきりするにちがいません。」ということでございます。

ここにも書いてありますように、必ず長生きできるんだという保証はなにもないのですけれども傾向的にそういうことがいえるというデータでございます。あと一、二、ご紹介をさせて頂きますと、整形外科の先生のお話で、これは都立台東病院整形外科医長兼スポーツ整形外科医長という肩書をもたれた黒沢先生の書かれているのを新聞でみつけたのですが、これを読ませていただきます。『整形外科の待合室は今日も満員である。待つておられる過半数は中高年の方だ。戦前までは『人生五十年』といわれたのに、現在は『人生八十年』といえるほど。しかし、寿命は延びても老化現象は避けられない。生きるために最低必要なものを食べ、死ぬ直前まで何らかの肉体労働を続けなければならなかった昔にくらべ、現代は飽食と運動不足の時代である。運動器といわれる骨、関節、筋肉などは、使わなければ衰えも早い。それに高齢と肥満が重なれば尚更で

ある。六十年を過ぎるころから膝が徐々に痛み始め、ひどくなると脚がO脚に変形し、痛みのために歩行もままならなくなる変形性膝関節症などはその典型である。南アフリカの医師の研究によれば、奥地に住んでいる原住民と都会で生活している黒人とくらべると、変形性膝関節症ははるかに都会生活者に多いという。この病気がどうして起こるかは不明だが、少なくとも適度な運動がその発生の予防に係しているという有力なデータである。骨折というと、一般の人は若い人のけがと思われがちだが、骨折の患者さんのほとんどは、お年寄りの股のつけ根の部分、大腿骨頸部の骨折である。ちょっとした事で転倒すると、お年寄りでは若い人にくらべ骨がもろく弱くなっているため簡単に大腿骨頸部を骨折する。この部分は骨折すると自然に骨がつかない。そのため手術が必要なのだが、お年寄りでは手術後の入院生活中にボケがきたり、あるいは肺炎、膀胱炎などの余病を発生して重大なことになるがちである。スウェーデンの医師の研究によると、年々この骨折は増加しており、あと二十年もすると現在の医療機関では収容し切れなくなると予想している。

これらの病气やけがのかなりの部分は、高齢になるまで適切な運動を続けて骨、関節や筋肉を委縮させないようにすれば防ぐことができる。中高年の方に、体操や運動のアドバイスをしたり、関節や骨の病气になりにかけの方には適切な運動療法も行つて治していくのも、私たちスポーツ整形外科の任務である。起こってしまった病气を、高度な医療機器を用いて診断、治療することだ

けが、医療、医学ではない。むしろ未然に防止する予防医学こそが将来の医学の姿と考えている。』といわれております。

次に申し上げたいのは、池上晴夫という筑波大学体育科学系教授のもので、今月の三日に毎日新聞に出ておった記事ですが、紹介させて頂きますと、「健康には適度な運動が必要であり、運動が不足すると体力が低下したり、健康がおかされたりする、とよくいわれる。からだには運動に対する自然の欲求がすでにプログラムされているように思われる。発育期の子供をみると、それがよくわかる。彼らは暇さえあれば走り回り、じゃれ合い、とっ組み合いをする。それが彼らのからだや心の発育を促し健康をつくるうえで重要な役割を果たしているのだが、彼らはそれを意識して動いているわけでは、決してない。つまりその動きは、意識下に内在し自然に発動される運動への欲求によるものと考えられる。

この自然の運動欲求は、しかし、発育の終了次第、しだいに衰えていくので、成人以後はこの種の運動が少なくなる。これに代わるのが生活の必要からくる身体活動、つまり労働である。二十歳前後から子育ての終る年代まで、人は汗水流して働かねばならない。この生活からくる身体活動が、従来は適度な肉体的刺激となり、体力や健康の保持に十分機能してきたと考えられる。ところが、近年になって労働が機械化されたり、各種の乗物が普及したりした結果、肉體労働や歩行の必要性が極端に低下してしまった。このため身体活動が不足するようになり、かくして運

動不足の弊害がクローズアップされてきた。だからこそ運動が必要であるとよく言われる。これは事実であろうし、われわれの健康を考えるうえで極めて大切なことである事はいうまでもない。しかしそれにも増して重要なことは、運動や労働が不足すると、生来備わっているはずの自然の運動欲求が衰退してしまうと思われる点である。これは成人にとっても言えることであるが、発育期の子供にも言える。受験勉強やテレビゲームにばかり時間をとられてしまうと、運動欲求がしだいに衰えてきて、運動しなくても平気でいられるようになってしまう。運動欲求の衰退は、単に健康の問題にとどまらず、人類学的な退化の問題として大きな意義があるように思われる。逆に運動を始めると、毎日のように運動しなくてはならない気持ちになってくる。これを運動中毒などといって冷笑する人がいるが、私は、いったん眠ってしまった運動欲求が再び目覚めた結果であり、素晴らしいことであると考えるのである。」と、こういう記事がありまして、我が意をえたりというような感じでご紹介させていただいた次第でございます。

大変前段の話が長くなったのでありますが、若干ここで私自身の略歴といいますが、今までの経過を話させて頂きまずと、先程も紹介にございましたように京都市内で生まれまして、現在満七十歳になるのでございます。小学校に入る前までは、渡辺姓じゃなくて中内という姓だったのですけれども親父が渡辺家に入りましたので一緒に来たために渡辺という姓になりました。小学校は京都の府庁前で、現在滋野中学校、当時の滋野小学校です。そこで六年の時に親父は商

業学校へ行かされたかったようですが、組の中で京都一中に入るものがおらんということで先生からなんとか一中に行かんかと奨められたのが一中に入るそもそのゆえんであります。一中の四年の時に、これ又、担任の教諭が三高の文科ならあるいは入れるかもしれないが、理科は無理だというようなことだったので、入れてもともと滑ってもともとということ、その時も父はむしろ理科系に進めたかったようでございますが、私自身、特にその当時なにがやりたいという目標もなく、受けてみましたところ偶然にも文丙にひかかったわけでございます。志望は甲乙丙と順番に書きましたら第三志望でひかかったというように、三高に入ることになったのでございます。入りまして最初の一年間、なんとなく家から通学しておったのでございますが、二年になりました、寮生活というわけにも行きませんのでなにか運動でもしなければいかんと考えまして、当時井垣さんから紹介あったように、どなたに進められたのか、忘れてしまっているのですけれども、とにかく陸上部へ入ったわけであります。中学の三年の時に小学校の区内に青年団というのがございまして、その青年団の運動会で四〇〇メートルを走りましてところがまたま一等になった。その後一中での運動会でやはり四〇〇メートル走ってみたところが二番か三番でそこそこ走れたと、そんな経験があったものですから走るぐらいなら大したことではなかうと、運動部の中でも一番楽しんじゃなかりうかと思つて入ったのが運のつきでございます。

正直に申し上げまして、練習が大変きつく、先輩各位に尻ひっぱたかれながらやっていたとい

うことでございます。ところが走らせてみるといっこうスピードもないし、長いのを走らせても続かないし、これはものにならんぞということだったと思います。結局、四〇〇M、八〇〇M、当時中距離と称しておりましたが、とにかくお前は中距離でもやっておれということで毎日練習だけは一生懸命やったつもりでおるわけでございます。ところが残念なことに練習の甲斐もなく一向に伸びず、補欠に終始したわけでございます。三年の一高戦の時にたまたま八〇〇メートルの正選手の一人が故障をおこしまして急遽お前が走れということになったのでございます。その時、四〇〇メートルのトラック二周ですから、最初の四〇〇Mはなんとか皆にくつついて走っていたのですが、残念ながらもう四〇〇M辺で息切れしてまいりまして、つぎのコーナーにかかるところでスパイクをコースのレンガに引っ掛けて、転倒、その後、何度か転びながら泣き泣きゴールにたどりついたという経験を致しました。そんなことで、私は今でも非常なコンプレックスを感じておりました、三高陸上部の落第生だと思っておるのでございます。つまらぬ話を申し上げましたが、三高を出まして、京大に入りましたけれども、とても陸上部に入るような力はございませんので、結局何にもせずにすごしました。

京大法学部から後はどうするか、ということでありましたが、三年の時に丁度同級の友達が、その親父さんが当時の陸軍主計の偉いさんだったようで、本人も陸軍の主計に行くんだというので、一緒に行ってみようかと付き合っただんですが、最初に身体検査がございまして、まず軍医が

手を握ったところが微熱がある、こりゃ駄目だ、来年出直してこい、と言うことで放りだされたので諦めまして、夏に満州の高文の試験がその年に初めて行われたので、当時、そういう風潮が強かったと思いますが、私も満州にでも行ってみようかという気をおこして、その試験を受けたのであります。幸い学科試験は通過したのですけれども、身体検査の段取りになって考えてみますと、前に微熱があるといわれたように、当時、肺の具合が必ずしも良くなかったと思います。そんなことで、これも駄目だと諦めまして、秋に就職試験で住友でも受けてみようかということを受けてみましたところが幸いにして入ることができまして、十五年の四月から住友金属の大阪にあります製鋼所というところで働くことになったのでございます。

それからご承知のように徴兵検査があるわけであります。徴兵検査にまいりましたところが眼科のお医者様がたまたま三高陸上部の先輩である千田信夫さん、私より四年上の方だったと思います。当時万能選手として活躍されたように伺っておりますが、この方が偶然にもその時の眼科のお医者さんであつたわけで、私が陸上部におつた頃、時たまグラウンドにおいていただったので、私はよく存じ上げておつたのですが、千田さんの方もどうやら私に気がつかれたようで、お前かというような顔付をされておりました。ものを言うわけにはいきませんので、顔つきだけの判断ですが、そこを済みまして、他の検査も終り、最後の徴兵官の宣告の所にまいりましたところが、「渡辺源太郎、第二乙種合格。お前は非常に目が悪いから氣をつけよ」こういう御託宣を頂いた

のでございます。今でもそうなんですけれど私、大した近眼でもありませんし、それ以外に目の悪いところはなかったはずでありますがそういう注意を受けました。これは千田先輩がうまくやってくれたんだなというような感じを持ちました。ところがその千田先輩は、残念ながら大東亜戦争中に戦死をされたように承っておりますが、私の方は幸いにしてそんなことで、徴兵検査を終り、しかも勤めておりました工場が軍需工場でございましたために、当時大東亜戦争になりましても召集延期ということがございまして、他の人がどんどん召集されて行く中で、幸か不幸か、最後まで残りまして、ついに軍隊の経験はないのでございます。しかしながら戦後帰ってきた連中の話を聞きますと、とくに大陸方面へ行った連中は戦争しているのかいないのかわからんというふうな冗談話もありました。最も畠山さんのように随分インパールで苦労されたという方もいらっしやるわけですけども、私自身も軍需工場ですから、やはり終戦直前は空襲をうけて、抵抗のしようがないので、あちこち逃げまわるのに苦労し、何度か焼夷弾、あるいは爆撃等のためにやられなかった経験もしておるのであります。

そんな次第で終戦を迎えましたが、その後年月が経ちまして、昭和三八年だったと思いますが、三高と松本高校のOBによるところのアルペン戦が松本で開かれておるということを伺いまして、そちらにおいでいただいている久米大先輩のお供をして松本へでかけたのでございます。久しぶりにスパイクを穿きまして百メートルを走ってみましたところが十四秒そこそこのタイムで走る

ことができてまして、これは、まだ満更すてたものでもないなあという気になりまして、その後も何回かアルペン戦に出場させていただき、そして先程ご紹介頂きました井垣さんとも一緒に走らせてもらって、そこそこお付き合いできるようなことであつたのでございます。これで大分自信がついてきまして、それと相前後して住友金属の陸上団というのが今でもございますが、その当時陸上団の団長をおおせつかりまして、選手と一緒にスタートの練習をしてみたりというようなことをやっておつたのでございます。

昭和四十二年に住友金属の子会社である住金化工、これはご承知の方もあるかもしれませんが、住友金属の溶鉱炉に使うコークスの生産を主にした工場でございます、私がまいります前からある程度陸上競技に力を入れており、私が行きましてからは、更に又発破をかけまして、長距離を中心に体制を整えてまいりました。工場では昼夜交替制でございますし、社員の数もそう多くはありませんので野球とか、その他の団体競技のように、揃って、練習するのがなかなか難しい、又経費もかなりかかるといふことで走る方は必ずしも全員揃わなければできないといふことはございませぬし又費用の面でも比較的安あがりではないかといふことで力を入れてまいつたのであります。今日、旭化成があのように強くなったのは以前の社長である宮崎という方が、やはり私が考えたのと同じように団体競技でないから集まって練習しなくてもできるし金も安くあがる、これにかぎるといふことで勧めたというように日経新聞の「私の履歴書」に書いておられたのを

読んだ記憶がございます。そこで、一応そんなことをやりだし、発破をかけたんですけれども、男子の方は歴史と伝統を持った、したがって有力選手を集めやすい大企業が少なくありませんので、なんとかしてやって行くのには女子を強化するのがいいのではなからうかと考えたのであります。男子でいいますと関西実業団では駅伝で神戸製鋼が圧倒的に強いわけでありますが、住金化工もたまには二位になったこともあります。全国大会にですと二十数チーム中二十位に入るのが極めて困難な状態であったのであります。そこで今申しましたように女子を強化するにかぎるといふふうに考えましてやりだしたのであります。今でこそ府県対抗女子駅伝、あるいは女子マラソンということで大変華やかに人気をよんでおりますけれども、ご承知の京セラ、あるいは大阪では三田工業、最近ではワコール、日本生命、ダイハツといったようなところがどんどん力を入れはじめまして、やっておりますが、私は今申し上げましたようにつとに女子の方に目をつけてやってまいったのであります。

住友金属は鉄鋼の大手会社でありますけれども、鉄鋼関係がかなり左前になりまして、最近や取り戻してきておりますが、大分調子が悪くなったということで、住金化工でもっておりますたコークス工場を全部住友金属の方へ引きあげてしまい、住金化工はささやかに化成品関係だけを扱うというようなことで大幅に縮小致しまして、そんなこともあって女子の陸上競技に力を入れるということが大分薄れてまいったのでございます。一時はご承知の方もあるかもしれませんが

が、数年前の東京女子マラソンで三位に入りました田中三恵というのが住金化工でございます。昨年のローマでおこなわれました世界選手権の女子マラソンで十位に入りました山下美幸というのも住金化工で育てあげた選手なのでございます。残念ながらこの山下も、故障をおこしまして最近姿を見せなくなっておりますが、二年前京都でおこなわれております女子駅伝で和歌山県が第五位に入りました。九人のメンバー中、七人までが住金化工の選手であつたのでございます。こんなことで対外的には会社のイメージアップにもつながり、又対内的には社員のもラルアップに多少とも貢献することができたのではないかと自負しておるわけでございます。

それから今度は私自身のことですが住金化工にまいりました当時から社内では各課工場対抗の駅伝大会があり、私がまいりました翌年一月に丁度ありまして、その第一走者は三十五歳以上で四〇〇メートルを走ることになつておつたのでございますが、たまたま事務所のチームで適当な人がおらんので、じゃあ走ってみるか、と、私、丁度その時五十歳だったので、走りまして七チーム中、七人中ですが六位で、その時には六十七秒というタイムであつたことを覚えております。その後は四十歳以上がアンカーというように制度が変わりまして、それが又二〇〇メートルに変わりましたが、これも毎年走りまして、数回区間賞を取るといふようなことをやっております。その他、和歌山県では職場体育連盟の陸上競技大会が年一回ございまして、四十歳以上の六〇メートルとか、あるいは一〇〇メートルとかいったものがありましたので、いわゆる率先垂範というこ

とでいい恰好を致して参加しておたのであります。

そこで、いよいよマスターズ陸上競技のお話に入らせていただきたいと思うのであります。お手元に広告のパンフレットを入れておりますので御覧いただいておりますと思いますが、マスターズといえますと何かものものしく感じられるかもしれませんけれども、ゴルフとかテニスでは超一流選手の競技であります。我々のやっておるのは日本語でいいますと中高齢者の陸上競技という程度の意味でございます。欧米各国ではすでに二十数年前から盛んにおこなわれておりまして、一九七五年にカナダのトロントで第一回の世界大会が開催されて以来、二年ごとに世界選手大会が行われているのでございます。この大会は男子四十歳以上、女子三十五歳以上で五歳きざみに分ける。例えば四十五歳から四十九歳まで、五十歳から五十四歳までといったふうにグループ分けでやるのであります。そういう点では、例えば六十歳から六十四歳までの人についていえば、六十二、三歳になりますと何とか早く六十五の方に入りたいという気になるのであります。普通の人は年を取るのを嫌がるのが通例ですけれども、我々マスターズの競技をやっているものは早く二、三年たたんかなというような感じになるのでございます。第二回の世界大会はスウェーデンのエーテボリというところで開かれましたが、この時に和歌山から二人の人が参加致しました。世界各国の盛んな状況を目の当たりに見てまいりまして、是非とも日本も大いにやらなければいかんということで、私も誘いを受けまして、和歌山で日本で初めてマスターズ陸上競技ク

ラブというものを結成致しました。それが丁度十年前ですが会員としては僅か十数人で、その中では六十歳の私が最高齢者でありましたために会長になれたということになったのでございます。

その後、大阪・兵庫・京都・などで近畿各府県を中心にしまして、昭和五十三年と五十四年に西日本選手権大会というのを和歌山で開催しましたところが、関東、四国、九州あたりからも多数同好の士が集まって参られましたので、五十五年に入りましてから日本中高齢者陸上競技連合を結成致しました。そこで会長にはオリンピック三段跳のゴールドメダリストである織田幹雄先生にお願いし、副会長には棒高跳で有名な西田修平氏をお迎えし、私も日本で初めてクラブを作ったという故をもちまして副会長の一人に選ばれたのでございます。その年の秋に第一回の全日本選手権大会を和歌山で開催致しました。第二回以降は甲府、東京の国際競技場、長崎、沖縄、徳島、東京、広島と回りをまして、本年は第九回をこの七月三十日、三十一日に秋田で行うことになっております。参加者の数もおいおい増えてまいりまして、第一回は三百名程度でありましたけれども、第七回の東京大会では千人近い数にまでおよび会員の数も年々増えてまいりまして、現在四千人を越える状況になってまいっております。

会員の中にはかつての名選手、たとえば現在神奈川県マスターズの会長である田島直人さんは京大で三段跳で有名な方であることはご承知の通りでございます。又元マラソン選手であった寺沢徹氏とか、多数のベテランがおられますが、一方年を取ってから陸上競技をやりだしたという

方も多数おいでになるのでございます。そのような人々が陸上競技を通じて生涯生き甲斐を持ち健康を謳歌し、同年代と楽しく競いあい、そして若い人達との交流をも積極的に進めておるということでございます。陸上競技は走る、跳ぶ、投げるを中心にするすべてのスポーツの基本であり、経験のない中高齢の人でも最も馴染みやすいスポーツではなからうかと思うのでございます。因みに跳躍で有名な南部忠平先生も日本マスターズの顧問としてご指導をいただいております。ところでございます。世界大会は、先程も申し上げましたように、一九七五年にカナダのトロントで開かれまして以来、二年ごとに各国で行われております。第二回以後スウェーデンのエーテボリ、西ドイツのハノーバー、ニュージーランドのクライストチャーチ、中米のプエルトリコのサンファン、イタリアのローマ、そして昨年末にオーストラリアのメルボルンで開催されました、第八回は来年の七月から八月にかけましてアメリカのユージーンで開かれることになっております。私自身は第三回のハノーバーから昨年のメルボルン大会まで、ローマ大会を除いて四回参加を致しております。あと若干細かいタイムなどを申しあげて恐縮ですが、ハノーバーでは六十歳代一〇〇メートルで八位、この時一三秒六五、二〇〇メートルが六位、タイムが二十八秒〇九、四〇〇メートルが五位で七七秒八七、それからクライストチャーチにおきましては六十歳代後半の六四歳で、最も不利な状態ではありましたが、一〇〇メートルは準決勝で落ち、この時のタイムは十三秒四三、二〇〇メートルが四位で二十七秒九九、これは準決勝のタイムの方が良くて二

十七秒七〇という記録をだしております。四〇〇メートルが五位で六十三秒六〇、四〇〇メートルハードルが二位に入りまして銀メダルを貰ったのですが、七二秒四五ということでした。

それから二年後のプエルトリコでは、六十五歳代に入りましたので条件がいいわけでありすが残念ながら一〇〇メートルは七位十四秒一〇、予選のタイムの方が良くて十三秒六七、二〇〇メートルが七位、これも決勝タイムは二十八秒七三ですが、予選の方が良くて二十八秒二〇、四〇〇メートルは四位で六十五秒六六、一〇〇メートルハードルも走りまして六位で二十一秒二九、これも予選の方が良くて二十秒九六、四〇〇メートルハードルが四位で八十二秒七八ということでごさいました。実はこの四〇〇ハードルの問題なんですけれども、この時六十五歳代の若い方なのでかなり期待を持って参ったのであります。各種目とも強い連中が現われてまいりましたので一〇〇、二〇〇では辛うじて準決勝を通過する程度で、四〇〇メートルハードルでは前回の六十歳代の時に二位になっておりますし、その時の優勝者はまだ六十歳代に残っておりますので私にとっては非常なチャンスでありまして、内心優勝できるのではないかといいつもりで行ったわけであります。出場メンバーをよく調べてみますと、私が三コースで、隣の一コースがアメリカ人ですが、どうやら実力的に同じような感じであります。ご承知のように四〇〇メートルはコースごとにスタートの位置が違うわけで、四コースの人は私より前でスタートを切るわけです。作戦としては早目に四コースの人に詰めておいて最後のコーナーを回るまでに抜いてしまおうという

つもりでスタートを切ったわけであります。前の選手ばかりに気を取られておったものですから、第一ハードルが近付いたのに気がつかず、目の前に近づいてからあわてて跳んだけれども、残念ながら前足でハードルを引っ掛けてはったり倒れてしまいました、なんとか立ち直り必死になって追いかけたけれども残念ながら七人中四位で終わりました。

そんなことで甚だ残念な思いが残ったわけですが、その次のローマ大会の時はたまたま左の膝を痛めまして参れませんでした。この膝を痛めた理由なのですが、それまでは会社のすぐそばに三〇〇メートルのトラックがありまして会社が終ってから練習しておったわけですが、非常勤になりましてから和歌山を引きあげて、今、豊中におりますが残念ながら練習する場所がありません。二キロ程離れたところに服部緑地という所がありまして、そこに四〇〇メートルの立派なトラックがあるのですが、個人の練習に貸してくれません。外の方に全天候型のトラックで、一五〇メートルのコースが二列造ってあるのですけれども、カーブがあるのはやむを得ないとしても傾斜があるのです。その傾斜の所で下りをフルスピードで走りまわったのですが、これが膝を痛めた大きな理由であります。やはり下りをフルに走りますとどうしても膝に大きな負担がかかるわけです。それにやっと気がつきまして今では上り専門に練習をしているのでありますが、そんなことでローマには参れませんでした。その次が昨年の十一月から十二月にかけての第七回の世界選手権でございます。お手元にプリント、これは陸上競技マガジンという日本陸上競技連盟の

機関紙である雑誌ですが、その中に出ている記事をコピー致しました。そこに日本のチームの成績が出ておるわけがありますが、実は毎回織田会長がだいたい選手団長でおいでいただいておりますのですけれども、この時たまたまご都合がつかずいかれませんでしたので私に団長をやれということ、選手応援団含めて六十名のメンバーを引率して参ったのでございます。成績につきましてはそこにございますように今までにない良い成績をあげることができました。金メダルが五、銀メダルが十五、銅メダルが九、合計二十九個のメダルを取って参りました。四位が十三人、五位が十二人、六位が三人ということで入賞数実に合計五十七におよんだのでございます。

私自身もそこにありますように一〇〇メートルはこれ又残念ながら準決勝で落ちました。記録は十四秒五八ということでしたが、九位のタイムでございましたために決勝進出ならずということでございます。因みにこの時の七十歳代の一〇〇メートルの優勝者は圧倒的に強くてタイムを申し上げますと十二秒七二、七十歳代で十二秒七二というとてもないタイムを出しておりますが、これは追風の為参考記録になっております。私の話にもどりまして、二〇〇メートルが二九秒九八で五位、四〇〇メートルが六七秒三二で二位、八〇メートルハードルが十六秒五二で四位、最後の四〇〇メートルリレーのアンカーをやりまして三位に入り、まずまずの成績であったのであります。それから甚だ残念だったのですが、四〇〇メートルで正直いつて優勝を狙えたのであります。又実質上は私は優勝したのだと自惚れておるのであります。といえますのは予選のタイ

ムが六十六秒三六ということで一位のタイムで通過致しました。第二位のタイムが六七秒三二でした。決勝で私が四コース二位の人が五コースということであります。この時も前の四〇〇ハドルの時と同じように前半で詰めて、最後のコーナーへ行くまでにトップに出ておくというつもりで走ったのでありますが、残念ながらやはり相手の方がラストのスピードが勝りまして、最後のコーナーを出るまでに一旦リードしたのですが、コーナーを出てから逆転されまして、ついにこれも優勝を逸しました。ところがこの時の優勝者のタイムは六十六秒七二であります。従って私がもし、予選の時のタイム六十六秒三六を出しておれば悠々と優勝できた。ゴルフじゃないですけれども、予選タイムと決勝タイムをトータルして計算するならこれも私の方が勝っておるであります。一発勝負ならばおそらく勝ったのではなからうかと勝手に自惚れているのでございます。これは負け惜しみにすぎないのでありますが、そう感じております。やはりレース運びが下手だったんですけれども、予選の時、強い相手はおらなかったのですから、何もゴール前で無理してタイムを出す必要がなかったのであります。実はその前日に朝日新聞の特派員が来ておりまして、晩飯と一緒に食った時に少々法螺を吹きまして、いろいろ自慢話をしたのが運のつきで、予選といいながら多少はいい恰好をせねばならないということで無理を致しまして、それが先程申しあげたような結果につながったのではなからうかと反省をしておるところであります。

ところで世界選手権と申しまして、別にオリンピックのように国内で予選をやって通過し、

第7回世界ベテランズ陸上競技大会日本選手団成績 6位入賞以内

クラス	種 目	氏 名	年令	順位	記 録	備 考
M40	100m	貝 原 幸 三	41	4	11"06(追参)	予②11"12
"	200m	"	41	2	23"52	準①11"23 予①23"46
"	走 幅 跳	田 中 修	40	2	6m50(日本タイ)	準①22"74
M50	400mH	鴻 池 清 司	50	4	63"46(日本新)	予62"92(日本新)
M55	棒 高 跳	小 林 米 雄	57	3	3m20(日本新)	
"	走 幅 跳	石 井 宗 雄	55	4	5m06	
"	"	大 谷 俊 男	55	5	5m06	110H予18"58(日本新)
"	五 種 競 技	松 本 善 一	57	5	3090点(日本新)	
"	三 段 跳	石 井 宗 雄	55	6	9m72	
M60	100m	冷 田 嘉 幸	60	2	12"35(追加)	予①12"50(日本新)
"	200m	"	60	2	25"70(日本新)	準②12"48(")
"	走 高 跳	山 本 登	61	3	1m42	
"	"	小 林 三 千 夫	60	5	1m39	
"	走 幅 跳	山 本 登	61	5	5m10	
"	三 段 跳	"	61	4	11m30(日本新)	
M70	200m	渡 邊 源 太 郎	70	5	29"98	
"	400m	"	70	2	67"32(日本新)	予①66"36(日本新)
"	80mH	"	70	4	16"52	
"	"	森 田 真 積	74	5	17"07	
"	走 高 跳	三 浦 卓 郎	70	5	1m32	
"	800m	"	70	2	2'46"22(日本新)	
"	10000m	津 下 治 郎	71	6	47'00"71	
"	棒 高 跳	森 田 真 積	74	2	2m70	
"	走 幅 跳	"	74	1	4m74	
"	三 段 跳	"	74	1	9m61	
"	"	三 浦 卓 郎	70	4	9m37	
"	2000m障	"	70	3	9'41"45	
"	マラソン	津 下 治 郎	71	2	—	
M80	200m	加 藤 博	80	5	42"06	
M70	五 種 競 技	三 浦 卓 郎	70	2	3972点(日本新)	
M75	800m	増 田 和 市	76	1	3'02"50(日本新)	
"	1500m	"	76	1	6'05"38	
"	10000m	"	76	2	47'25"15(日本新)	
"	走 高 跳	但 田 恒 夫	76	4	1m05	
"	三 段 跳	"	76	4	6m91	
"	走 幅 跳	"	76	5	3m30	
"	"	永 田 良 行	77	6	3m16	
M80	100m	加 藤 博	80	5	19"42	
"	400m	"	80	3	1'38"14	※投てき重量
"	800m	"	80	2	3'52"12	砲丸投
"	1500m	"	80	3	7'56"91	M40~45: 7.26kg
"	棒 高 跳	岡 崎 正 己	82	2	1m45	M50~55: 6.0kg

"	砲丸投	"	82	3	8m02	M60~65: 5.0kg
"	や種競	"	82	1	26m46	M70<: 40kg
"	五円盤投	"	82	2	3023点	W35~45: 4.0kg
"	走幅跳	"	82	4	23m10	W50<: 30kg
"	走幅跳	"	82	2	3m24(日本新)	ハンマー投
W55	80mH	横井和代	56	3	17"49	W50<: 4.0kg
W60	砲丸投	辻井五十鈴	64	5	8m99	
"	砲丸盤投	"	64	5	22m52	
W70	砲丸投	鴻野政代	73	3	7m05	※M60五種競技
"	砲丸盤投	"	73	4	13m94	田元久木 63歳
		鴻池清司				3024(日本新)
M40	4×100mR	八田努(40)		4	47"05	
		宮井昭(42)				
		貝原幸三(41)				
		山崎英也(62)				
M60	"	田元久木(63)				
		河合繁(61)				
		冷田嘉幸(60)				
		森田真積(74)				
M70	"	立石祐一(74)		3	57"54	
		三浦卓郎(70)				
		渡邊源太郎(70)				
W55	走高跳	横井和代	56	4	1m16	

そのうえでということではございません。すべて自費ですから行きたい人が勝手に行った方がいいこととあります。だから必ずしも日本のナンバーワンが出ているとはかぎっておりません。けれども観光が主眼の人は別として殆どの人がマスターズの一流選手が出ているのでございます。その中でも日本の選手で有名なのは成績表の中程にも出ておりますが、七十歳代の幅跳びと三段跳びに優勝しております森田真積という方があります。この方は二高、東大の出身でオールドインターハイでも有名な人でありまして、七十歳代の幅跳び四メートル九六、三段跳びが十メートル二五という、いずれも世界記録を持っておりますのでありますが、プエルトリコでの私の一〇〇メートルの記録、予選で十三秒六七と申

しあげましたが、彼も恰度その時、七十歳代の一〇〇メートルの予選でこれもどんぴしやり十三秒六七という全く同じ記録を出しているのであります。ところが彼は幅跳び、三段跳びが本命でありますから、一〇〇メートル決勝は棄権をしたのです。おそらく走っておれば良いところに入っておったのではないかと思ひます。そんなことで彼がいうには、私が七十歳になった時点で、彼は七十四歳だから一〇〇メートルと一緒に走ろうじゃないかという挑戦を受けたわけであります。ところが彼は私に挑戦をしておきながら、その後は忘れたかのごとく一〇〇メートルは走ろうとしないのであります。しかしながら相変らずのスプリントを持っておりまして、先程申し上げた世界大会の七十歳代の四〇〇メートルリレーの第一走者は彼が引き受けまして、スタートではトップを切つて第二走者にバトンを引きついでおります。結局二走、三走で一人づつ抜かれて最後三位になったという事です。

先般の世界大会での最高齢者は九十五歳のインドのアザドという人ですが、独立運動のかどで一九一四年に投獄されまして絞首刑の判決を受け終身島流しの刑に処せられて一九二一年に脱走したのですが、翌年又捕えられ、又列車から飛び降り脱走したりして、偽名、変装をしておつたが又捕まって逆戻りをするというようなことを繰り返して、遂に一九三九年ガンジーのアドバイスによつて出獄を許されたのだそうであります。そのアザドさんが九十五歳、ただひとりの二〇〇メートルで一分五十八秒九、これが世界記録になったのですけれども、ゴールインしたの

であります。走っているのをみましたが、チョコチョコ走りという感じながら、とにかく九十五歳とは思えず、二〇〇メートルを最後まで完走されたということでございます。走り始めたきっかけというのは、逃げまくっているうちに覚えたのだそうであります。健康法はたっぷり外気を吸うことだそうでございます。今回参加しておりませんでした、世界大会の名物男に西ドイツのアスミーという、今七十四歳位だと思いますが、彼は第二次世界大戦の時にパイロットで戦場で両眼の視力を完全に失いました。ところが第三回のハノーバー大会以来ニュージーランド、プエルトリコ、ローマと連続出場致しまして、一〇〇メートル、二〇〇メートル、四〇〇メートルでいつも優勝乃至は三位以内に入っておったのであります。一〇〇、二〇〇、四〇〇共いつもアウトコースで、その外側を息子さんがロープを持って誘導して走るといふわけがありますが、実に素晴らしいランナーでありまして、私自身もプエルトリコでは同じクラスと一緒に走りましたが敗けております。昨年のオーストラリアでは不参加でありましたが、西ドイツから来ている人に聞いてみますと旅費の都合がつかなかったといっているようでございますけれども、私はどうもそうではなくて、非常に負けん気の強い人ですから、どうやら今度は強いのが沢山出てくる上自分は七十四歳だし、これでは勝ち目がないということではなからうかと勝手に、想像しておるのでございます。尚、ついでながら申し上げたいのは、これも先程新聞に出ていたのですが日本にも鉄人レースに全盲ランナーというのが出ております。瀬戸内海の小さな島で丸亀市の広島

というところで、明日七月十七日瀬戸大橋讃岐広島トライアスロン大会というのが催されるそうですが、神奈川県の子会社の役員の方で全国盲人マラソン協会々長で杉本さんとおっしゃるのですが、伴走者の友人と共に出場して水泳、マラソンでは友人にリードしてもらい、自転車は二人乗りをつかうそうであります。水泳は一・五キロメートル、自転車は四〇キロ、マラソンは一〇キロで制限時間が四時間半だそうです。杉本さんは四十二歳の時に網膜の病気で視力が低下しはじめて四年後に完全に失明、現在は七十歳だそうです。家に籠ってしまふと健康に良くないということで十年前からジョギングをはじめて、これまでにホノルルマラソンをはじめ国内外のマラソンに一六〇回も出場されているそうです。トライアスロンにつきましても昨年三月にサイパン島で水泳一・五キロ、自転車六〇キロ、マラソン一五キロを四時間五十分十五秒で完走されたという素晴らしい記録を持っておられるそうです。

又私の話で恐縮でございますが、マスターズの陸上競技クラブを作りました最初のころは参加者も大変少のうございまして、第一回、第二回の西日本大会、第一回の全日本大会、この三回を通じて六十歳代の一〇〇、二〇〇、四〇〇の三冠王をつづけて取り記録も一〇〇メートルが十三秒三、二〇〇メートルはニュージールランドでの二十七秒七〇、四〇〇メートルは六十二秒フラットというのが当時の日本最高記録ということでございましたが、その後参加者が増えて参りまして、だんだん強豪が現われてまいりました。私自身の足の故障ということもありましたが現

在は私が持っております日本記録は四〇〇メートルの六十五歳代（六十三秒二）と七十歳代（六十六秒三六）、それから一〇〇メートルハードルの六十五歳代（二十秒九六）、四〇〇メートルハードルの六十歳代（七十二秒四五）と六十五歳代（七七秒七）という五ツの日本記録を現在持っているであります。それから西日本、全日本、あるいは近畿大会、大阪大会、和歌山大会、こういった大会で三冠王になること十四回、各種目ごとの優勝回数を数えますと七十回におよんでおります。今年に入りまして三回の大会で九連勝致しております。一〇〇メートルのベスト記録が十四秒一、二〇〇メートルが三十秒一、四〇〇メートルでは六十六秒四ということで一応がんばっております。

次に旧制高校の陸上部OBを中心と致しましたインターハイのことをお話し申し上げたいと思います。三高と松本高校のOB戦につきましては先程申し上げました通りであります。その後昭和五十年からOBインターハイというのが始まりまして、今年の九月には第十四回目を迎えることになっております。私は第四回から参加致しまして、三、四回マスターズの関係で欠席したこともございますが、十三回目までの分を並べた成績ですが、一〇〇メートルは十三秒四で三位、二〇〇メートルが二十七秒九でこれも第三位、四〇〇メートルが六十二秒フラットで第一位なのでございます。オールドインターハイですから私より十歳も若い人がおるのですが、その中で四〇〇メートルでは私がナンバーワンでございます。この四〇〇メートルの記録を出したのが第七

回の六十四歳の時でございます。その前の年の六十三歳の時に六十三秒二というタイムが出ました。そこで考えたのですが実はなんとかの四〇〇メートルで自分の年齢以下のタイムが出ないかということを考えはじめたのであります。各年齢別の世界記録表というのがありますが、それを見ますとだいたい五十五歳位から八十二歳位までのところで該当の年齢以下の記録が出ているわけです。これを見て私も、がんばらなければと思ひまして六十四歳の時踏ん張ってみましたところが六十二秒フラットということできく六十四歳という年以下の記録を出すことが出来たのであります。この記録について今一つ申し上げたいのは、私がこれを出すまでは一〇〇メートル、二〇〇メートル、四〇〇メートル、この三種目につきましては成蹊のOBである山崎英也氏が一位を占めておったのでありますが、その四〇〇を私が破ったということになるのであります。彼は私よりも七歳若いのでありますが、その後のオールドインターハイごとに関心と私の記録を破りたいということではななばっているのですが、まだ破られておりません。マスターズの大会では、彼はすでに六十歳代で六十一秒五三という記録を出しておりますので、これが六十歳代の日本記録になっておりますが、彼も今六十三歳ですから恐らく今後私の記録六十三秒を破ることは至難の業ではななかうかと、勝手に考えておるところでございます。尚、三高の陸上部のOBでは日本通信衛星の社長をなさっております神谷氏も、マスターズの大会で大変ご活躍をいただいているのでございます。ゴルフをやっておられる方は勿論ご承知の通りでございますが、自分の

年齢以下のスコアでラウンドを致しますと、エージシュータといわれるのでございます。七十歳の方が七〇あるいは六九で廻るのは中村寅吉さんのようなプロ級でないと無理だろうとは思いますが、アマチュアでいえば八十歳以上であれば可能性があるのではないか、あるいは日本でも結構いらっしゃるのではないかと思います。ところが私が今お話し上げております四〇〇メートルを満年齢以下のタイムで走るということは、世界各国では相当おりますけれども、日本では私を知るかぎり第一号が私でございます。その後四人ばかり出ておるのを確認致しております。私が勝手に言っているのですが、エイジランナーといって自慢話の種にしているのです。ございます。先日の七月十日に大阪のマスターズ選手権大会がありました、ここでも六十六秒八というタイムを出しまして、二十回目のエイジランを達成したところでございます。

陸上競技というものについて書いた本がございますのでちょっと簡単にご紹介をさせていただきます。岩波ジュニア新書で川本信正さんという方ですが、「スポーツ賛歌」という本ですが、この中に陸上競技のことについて四頁程に亘って書いておられます。一部分だけ申し上げますと「陸上競技の始まりというのは古代ローマ以後歴史の表面から姿を消していた人間の走るレースが、十七世紀後半のイギリスで異様な姿になって復活をする。チャールズ二世の時代にイギリスの貴族の間で新しい流行が始まった。貴族達が互いにお抱えのフットマン馬丁をロードで競走させ、これに金をかけて楽しんだ」というようなことがそもそもの起りのように書いてあります。

「その後、障害物競走というようなものが起つて来て、競馬が陸上競技に大きな影響を与えている」というようなことが書かれております。「競馬を真似た陸上競技で一八五〇年、ある日オックスフォード大学でエクスタカレッジの学生達が、近くの農場で二哩のコースに二十四か所の障害物を設け、障害物競走を行った。途中で落馬して失格した一人の学生が、悔しさの余り改めて馬に乗らずに足で走って勝負をつけようと提案した。翌日の午後同じコースで馬を捨てての再レースは、前日落馬した学生の優勝となった。これが今でもオリンピックなどで陸上競技の人気種目三〇〇〇メートル障害物競走の発祥とされている。まさに競馬の真似だった」というように書かれております。

最後になりますが、三高陸上部の歴史については、陸上部にいらっしゃった方は、御存知のよううに白銀会の会報三十八巻に、久米先輩が陸上競技小史を書いていらっしゃいますので、省略させて頂きます。「三高初期のスポーツといえば、明治初頭に西欧より輸入された体操を基本とする学校体育より発したものである」ということが出来よう。第三高等中学校と称した明治二十年頃、校長として着任された折田彦市先生は、三高へ来られる前、官立体操教習所の所長をしておられたので、三高着任の時も同所の教官（古野成忠）を伴って来られた。従って三高でこの体操が課せられたことも容易に想像できる。明治二十五年嶽水会の前身ともいふべき壬辰会が発会し「三高関係者が一致団結して文武諸般の技芸を練磨し、以って三高の氣風を養成する」ことを目的とした。

壬辰会の中にベースボール部、水上部と肩を並べて陸上運動部が名を連ねている。この頃学内の年中行事として「運動会」が開かれているが、これは駈けっこがその主軸をなす「お祭り」行事であった。壬辰会発足の翌二十六年創立記念の日を五月一日とすることが定められ、この日の中心行事として運動会が行われ、これが三高終焉の年まで続いた「記念祭」の先駆となった。運動会の駈けっこも明治三十二年、三十三年頃になると対部形式となりその優勝部に与えられたと見られる優勝旗の残闕が同窓会に保存されている。」とあるのであります。

随分時間がたちまして、丁度一時間半になりましたが、マラソンの一流選手ですと三十キロ以上走っているというところですが、ついでながらマラソンの距離が何故四十二・一九五キロということになったかということについて申し上げますと、ギリシャの故事にあるマラトンからアテナイまでは、三十六キロ七五〇メートルだったそうありますが、一九〇八年第四回のオリンピックがロンドンで開かれました時に、イギリスのウィンザー城からロンドンのシェパース競技場までが二十六マイルでありました。入口からトラックを廻ってゴールまでが三八五ヤード、この両方を加えまして、メートルにしますと四十二・一九五キロになるんだそうであります。これから四十二・一九五というのがはじまったと書かれております。

以上陸上競技を中心にいたしましてお話を申しましたけれども、今や老人のスポーツは何も陸上競技だけに限っておりません。現在野球部OBの方が毎年一高戦をやっておられると聞いてお

りますし、先日京都の旧制中等学校OBによる五百歳以上野球というのもあったように聞いているのであります。又水泳においても北村久寿雄氏は、三高の同窓生ですが、現在会長をなさっている日本マスタース水泳協会がごさいます。すでに日本でも世界大会をやっております、現に昨日から明日にかけて、東京で全日本大会が開かれていますのであります。又、乗馬でも新聞に出ておりますように六十三歳の女子選手がオリンピックに出場するというようなこともございます。その他ラグビーのような激しい競技からゴルフ、あるいはゲートボールに至るまでさまざまなスポーツがあるわけでありますから、どうか皆様方もそれぞれの体力に応じて適当に体を動かしていただきましていつまでも元気で老の青春を謳歌していただければ幸いです。現在NHKテレビの朝のドラマでガールズ・ビー・アンビシャスというのがでてきますが私はシルバー・エイジス・ビー・アンビシャスを最後にお贈りしまして終らせていただきたいと思います。大変拙い話御静聴ありがとうございます。

(元 住金化工株式会社副社長)